朝日新聞　第3種郵便物認可

「役場力」高め 活性化を

前参院議員から三木町副町長に

植松恵美子さんに聞く

前参院議員の植松恵美子さん(47)が三木町副町長に就任してから1カ月半が経った。あまり前例がないとして関心を集めた転身。国政と地方行政の両方に携わって見えてきたものは何か、人口減少に直面する地方の再生は可能なのか聞いた。

――副町長就任が話題になりました。

筒井敏行町長から「日本一、子育てのしやすい町にしたい。力を貸してほしい」と、お話をいただきました。自分の住む町のために一生懸命やってみようという気持ちになった。国会議員経験者が副町長を引き受けることはないらしいですが、そんな常識にはとらわれません。国政は過去のことですから。

――町政に携わって1カ月半が経ちます。

職員は非常に真面目でユニークなのに、自分の力を過小評価している感じがします。職員の能力が十分発揮される環境を整備し、「役場力」を高めることが私の役割。それが町の活性化につながる。今月から若手職員がリレーで所属課の取り組みについて情報発信するため、フェイスブックを始めてくれました。

――地方活性化が大きな課題になっています。

地方創生が叫ばれているが、「国が決めたルールやメニューから施策を選びなさい」と地方におろされる仕組みは相変わらず。例えば、今年度補正予算に経済対策として盛り込まれた交付金もそうです。この1カ月半で、県から「これをやっていないのは県内17市町のうち三木町さんだけですよ」と何度か言われた。今も金太郎アメが求められる。地方の自由度は非常に限定的だと実感しました。地方活性化は、国が予算や機会をいかに手放すかにかかっている。失敗したら自己責任、という状況なら地方自治体は必死にやるはずです。

――参院議員時代はオレンジ色の洋服がトレードマークでした。

政治家への道は、後援会もないゼロからの出発だったので、名前と顔を覚えてもらうために一生懸命でした。国会では参院議員242分の1だから、県民の皆さんに「ここにいますよ」というアピールだった。でも、オレンジ色は目立つから、着るのにエネルギーが必要。いまはあまり着ないかな。

――参院選後の1年半はどう過ごしていましたか。

いろんな国に行きました。世界経済における中国の台頭を目の当たりにする一方で、日本の存在感が薄れつつあることを強く感じた。親日国のトルコでは「日本に生まれて良かった」と思った。先人たちが築いた歴史のおかげです。安倍政権の外交・安全保障に対する危機感は一層強くなりました。

――副町長の次は首長選に立候補するのでは、という声も耳にします。

首長選？ 先のこと考えていない

そういう定まった価値観のなかで生きていないし、先々のことはまったく考えていない。ただ、臆測でも話題になるのは私を覚えていてくださるということ。ありがたく思います。

（聞き手・高橋福子）

温泉施設会社長。2004年参院選香川選挙区に民主党公認で立候補して落選、07年に初当選。12年8月、野田内閣提出の消費増税法案の採決で反対票を投じ、13年3月に離党。同年7月の参院選香川選挙区に無所属で立候補し、自民党新顔に敗れた。

36議案を提出 県議会が開会

浜田恵造知事は、当初予算について「人口減少への対応と地域活力の向上への対策を最重点とした」と述べ、正予算案が、全会一致で可決された。補正額は約34億円。

23日に代表質問、3月11、12日に一般質問がある。16日に閉会予定。